

ドッペルの椅子

作者：そせいらんぞー

二本目のタバコを吸っていると、二人目の男を思い出した。

朝の五時。まだ夏の日差しは地平線を越えられず、ひんやりとした空気からは、かすかにヒグラシの声が聞こえてきた。ふと髪を撫でる風は涼しく、寝起きの火照った体を冷ましてくれる。

朝のベランダでタバコを吸う習慣は、あの男と別れて五年経った今でも続いている。

覚えていることは多くない。顔すら曖昧にしか浮かんでこない。二人目については向こうから交際を申し出てきたからか、私はそれほど好意を抱いていなかった。一人の夜の寂しさを思い出していた当時、抱き枕の代わりが欲しくなっただけの話だ。

結局、本当に抱き枕の代わりで終わってしまったのは、互いの貞操観念のせいではなく、向こうは嫌われることを恐れ、私は望んでいなかったからだろう。互いに平行線を行っていたから、交わることが最後まで無かった。

彼がどれだけ寄り添おうとも、近づけないのが私という岸壁だったのだ。唯一の名残が朝のタバコだが、これは彼の習慣で、別れた後に私が勝手に真似たに過ぎない。

鬱陶しい黒髪を指で梳くこともなく、少しだけ過去に思いを馳せてみた。

これは未練だろうか？

吐き出した紫煙に尋ねると、正面から吹いた風が、薄まった紫煙を顔に返す。

顔に被った紫煙は、喉を舐めて服の隙間に滑り落ちてくる。温もりは無いのに心地いい。背中の寂しさに目を逸らし、私は部屋に戻る。

部屋に戻ると、白いマネキンがキッチンの中をせわしなく動き回っていた。このドッペルというロボットが普及し始めて既に十年近く経過しており、人間大のロボットが徘徊する街路やオフィスは、今ではすっかり見慣れた光景である。

かつてはポケベルが、次にガラケーへ、そしてスマートフォンへと入れ替わった『一人一台通信機』のパラダイム。これに並行して『一人一台ロボット』という常識をドッペルは生み出した。

かくいう私も五年くらい前から仕事が忙しくなって、立て続けに二台もドッペルを購入した。

うち一台は、いま私の朝食を準備してくれている。ドッペルがこなす作業は人間の物真似だ。人間がトレーサという機器を付けて作業すると、トレーサは脳活動や目の動きなど、作業に必要な情報をトレースする。そしてトレースした情報であるトレースパターンを元に、ドッペルは作業を再現する。

これによって、あらゆる生活は自動化できるようになった。

ドッペルの利点は、トレーサを付けて作業するだけで、パターン的な作業であれば誰でも簡単に自動化できるという点である。電子技術が発達し自動化による効率化が謳われても、多くの中小企業で作業の自動化が困難だったのは、自動化にかかるコストが莫大だったり、技術的に困難だったりしたからだ。ようは自動化を達成するまでに、手間や費用が掛かりすぎるのである。

しかしドッペルは人間と同じ大きさと形をしたロボットだ。人間が出来ることであれば、大抵のことはこなすことができる。工場の単純作業、単調な事務仕事、簡単な接客、子供の送り迎えまで、人間の生活におけるルーティンワークの部分を代替わりしてくれる。

起きて早々ドタバタしたくない私も、生活の一部をドッペルに委託することで、ベランダでタバコを吸うくらいの時間を獲得している。

朝食を食べ終わり、ごちそうさまと合唱すれば、それを合図にドッペルは食器を下げてくれる。「いただきます」と「ごちそうさま」が蔑ろにされつつあった中で、ドッペルの動作キーとしての意味が付属したことにより、この儀式は再ブームの兆しを見せていた。ボタンを押して命令するより、手を合わせる方が手軽なのだ。

身支度を済ませた私は、仕事用のドッペルと一緒に玄関を出ると、エレベーターで一階のエントランスに降りる。

昼食のことを忘れていた。だが今からコンビニに寄っていると、会社に着くのがギリギリになってしまう。

スマホを取り出すと、家で待機しているドッペルに新しい指示を出す。コンビニへ昼食を買いに行き、バスを使って職場に持ってくるトレースパターンを選択し、変数としての購入物品にパスタを設定した。

近くのコンビニのパスタは全てフェットチーネで揃えてあって、中でもカルボナーラがお気に入りだったが、一週間ほど前から姿を消してしまった。その代わりに出たのがレモン風味のクリームパスタで、カルボナーラよりサッパリしているぶん食べやすく、新しいお気に入りになってしまった。

私は仕事用ドッペルとともに駐車場に向かう。私が自動車を電子キーで開錠すると、ドッペルは滑らかな動作で助手席に乗り込んだ。しっかりと深く座席に座り、シートベルトを締め、きっちりと背筋を伸ばす模範的な姿勢だ。通勤運転のトレースパターンを呼び出さなくても、私がシートベルトを締めるだけで、ドッペルは車を発進させた。

朝の二十分ほどの通勤中、自動車の運転はドッペルに任せている。こうやって細かい日常をドッペルに委託することで、人々は有限な人生から無駄を取り除いている。たとえばこの私も、この通勤時間の二十分を自由に使えるのだ。寝不足分の睡眠を補うもよし、今日の仕事の確認をするもよし。今は後者を選択してスマホを操作していた。今日は中途採用の新入り君の初出勤日で、私が教育係だ。新人教育の一環として、初日から現場に赴くことになっ

ている。予定を決めたのは上司。強引に決定されてしまったので、私は従うしかない。

自動車が突然停まった。ふと見上げると、フロントガラス越しの信号が赤くなっていた。助手席のドッペルが自動車にブレーキをかけたのだ。といっても、ドッペルはハンドルも握らなければアクセルも踏まない。運転席には私が座っているのだから不可能だ。

ドッペルは自動車のドライブシステムと電子的に接続され、頭部のカメラアイで状況を把握し電子的に運転しているに過ぎない。赤信号や急な飛び出しに反応するシステムは、自動車の付属品であるトレースパターンで事足りる。通勤に使おうと思ったら、ドライブコースのデータさえあればいい。

青信号に導かれて車体がゆっくりと発進する。助手席を見ると、そこでは白いマネキンが無表情に正面を見据えていた。

コレが見ている風景は、私のソレと同じなのだろうか？

並木の緑も朝の日差しも、通勤の気怠さもドッペルには関係ないのだろうか？

馬鹿馬鹿しくなって、私はスマホに視線を落とした。ドッペルに情緒や感性を求めるなんて馬鹿げている。そんなものが無くたって自動車の運転は出来るのだ。むしろ余所見も居眠りもしないドッペルは人間より運転が得意だろう。ドッペルは所詮、スマホやパソコンと大差ない電子機器でしかない。

会社に着いて自動車は駐車場の駐車枠の中に入る。私が実際に何度か駐車してみた中で、一番うまく入れられたパターンを模していた。この駐車場は微妙に狭く、一般普及品の駐車トレースパターンだと、誤差で隣との距離がギリギリになることが稀にある。

私は緩慢な歩調で自動車を降りて入り口をくぐる。

営業所とは名ばかりの、手狭な賃貸オフィス。ドッペルのアフターケアやトラブル対応を主とする企業にはありがちで、我らがカナダD T Sもその例に漏れない。ちなみにカナダは社長の姓である金田であって海外企業ではなく、D T Sはドッペル・トラブル・サポートの頭文字。つまりドッペルに関するトラブルを処理する企業である。

損傷した部分の修理、摩耗パーツの交換、トレースパターンのデータ調整などを、販売元の会社でやるより安く対応したり、もっと踏み込んだ対応をしたりすることで差別化を図る。ようするに大企業では手が回らない細かいところに手を出してみみっちい稼ぎ方をしているわけだ。とはいえ、今やドッペルは個人単位で普及しているし、それなりに高価な代物だ。現代社会の生活必需品に関わる仕事なのだから安定して稼げる、堅実な会社であることは間違いない。

裏を返せば代わり映えの無い仕事を日々こなすだけだから、長く続けていると仕事のモチベーションは低下していく。私は今年で七年目になるが、再来年で三十になると気づくと、名状し難い焦燥感に囚われる。

本当にこのままでいいのだろうか、という解決のしようのない恐れ、不安。後ろについて

歩いてくるドッペルを見ていると、自分も繰り返しの生活ばかりを送るドッペルに近づいているような気がしてならない。

「おはようございます」

オフィスに入ると、私は健気にも自ら挨拶をする。返ってくる同僚や上司たちの緩慢な挨拶が、私に対する評価を物語っている。特別私だけがぞんざいに扱われているわけでもないのだが、数少ない女性社員でありながら、男性社員と大差ない接され方なのは、我ながらどうかと思う。

「夏見さん、ちょっといい？」

自分の椅子を引きパソコンの電源を点けたところで、奥にいる上司に声をかけられた。

西谷課長は、えらの張った顎と短く刈り込んだ髪、がっしりとした体格が特徴だ。アナログな体育会系そのもので、学生時代には柔道部に所属していたという。職場では瘦躯やメガネが多いので、かなり目立つ存在だ。

「新入社員の件ですか？」

課長の元まで小走りに近づく。傍までくると真上の空調から勢いよく冷気が降りてきて、少し汗ばんだ身体を容赦なく冷却していく。

西谷課長がクリアファイルを取り出している間も、ドッペルは山積みの書類を整理している。まるで執事かメイド、もしくは雑用係、あるいは奴隷だ。けれど人権問題に発展しないのは、ひとえにコレが機械だからだろう。

「そうそう。十時くらいに出社してくるから、挨拶の後で、この書類を書かせておいて。今日の昼までが提出期限。悪いけど、人事が急いでいるみたいだから」

手渡されたクリアファイルには、社会保険などの資料が十枚程度入っている。

「分かりました」

「それと……田崎くんが今日も出社してないんだけど、何か聞いてない？」

田崎さんは三十代の男性社員で、私とは殆ど接点が無い。それでも私に訊いてくるのは、お手上げ状態だからだろう。

「いえ、まったく。無断欠勤なんですか？」

「いや、体調不良って連絡は来ているけど、これで五日でしょ？　少し気になってさ。何かあったのかなって……」

私のような下っ端には分からないが、部下が欠勤するというのは課長にとっては死活問題なのかもしれない。彼の顧客を周りがカバーするので全体の負担が増える。上の人たちに管理能力を疑われたら左遷されかねない。

「特に何かあったというのもし聞いていません……すみません、役立てなくて」

「いいよ、また何か聞いたなら頼むね」

私は席に戻りクリアファイルの中身を検める。ご丁寧に全ての書類に記入例がついている

ので、つきっきりになる必要もないだろう。自分の事務仕事も山積みなので、新入社員に書かせている間に仕事を片付けられそうだ。

私が椅子に座ってそんなことを考えている間、ドッペルは傍らで直立不動だ。今は社内ネットに繋がって、出社記録を付けたり、スケジュールを確認したり、自動入力できる書類を片付けたりしている。できるだけ雑用はドッペルに任せよう、という常識は社会的に浸透しつつある。

一時間ほど事務仕事に没頭していると、入口の方で誰かが来訪者に応対している声が聞こえた。顔を上げると、周りの人たちも同じように頭を上げている。どうやら新入社員が来たらしいと察する。

オフィスの入り口と応対席の間にあるパーティションの向こうから、スーツ姿の若者の肩から上が見えた。あのパーティションは結構高さがあるので、座っている私からも見えるとなると、かなりの長身であることが窺える。

社員に連れられた若者がオフィスに入ってきて、こちらに近づいてくる。私は席から立ち上がって、新入社員を見つめた。

二十歳そこそこといった顔だった。若いというより幼いというのが近い。背丈は一八〇センチくらいあるが、ガリガリに痩せていて六〇キロもあるかどうか疑わしい。顔は面長だがパーツは整っていて、赤味を帯びた鼻がトナカイを連想させる。

彼を見ていると、ふと何か違和感があった。だが具体的には分からない。案内してきた社員が、互いを紹介する。

「彼が新入社員の熊野和人くん。……こちらが上司になる西谷課長、先輩の夏見さん」

「熊野です、よろしくお願いします」

緊張した風は全くなく、動きには若々しさも覇気も感じられない。正直、第一印象はそれほど良くない若者だった。

そのあと、熊野は皆の前で挨拶をしたのち、私の隣の席に座った。

「研修期間の間は、私が貴方の担当をします。早速で悪いけど、これを今から書いてもらえる？」

「分かりました」

書類を渡すと、熊野は真新しいカバンからペンケースを取り出して、ボールペンで必要書類に記入していく。見ていると、少し驚いたことがあった。

「字、綺麗ね」

完全な偏見だが、若い男は字が下手な印象があったが、熊野の字は習字を習ったことがありそうな丁寧なものだった。全体のバランスも取れていて、私よりも上手い。

「子供の頃に母に無理を言って、習字教室に通ったので」

「習わされたんじゃないくて、自分から？」

「はい。日本なら大人になっても字を書く機会は多いと思って……」

「へえ、どのくらいの頃？」

「小学校三年生の頃ですね」

随分と先見の明のある子供だ。そんなことを言う子供の姿は、私の貧困な想像力では思い浮かべられない。

人間関係を構築していくうえでも、相手の事を訊いた方が良いのだろうか？ あまり接点を持ちたくないが、挨拶の時よりは、いくらか印象が良くなっていた。単純なものだと自分でも思う。

でも結局それきり声はかけず、熊野が書類に記入している間に、私は午後の現場作業に向けての準備や事務仕事を終わらせた。その間に昼食を買いに行かせていた家用のドッペルが来て、昼食を置いて帰って行った。熊野の書類記入が終わるなり、すぐに人事部に持って行かせる。時計を見ると、まだ午前十一時過ぎだった。

「今後の仕事の予定を話しましょうか」

熊野にパソコンを立ち上げさせる間に、私は共有サーバーに、予定表の表計算ソフトの電子ファイルを入れた。それを熊野に開かせる。中身は簡単な半年間のスケジュールだ。

「しばらくは、午前は研修、午後は普段の仕事……事務仕事と現場作業の流れね。明日から出荷部門、業務部門を回って……」

画面に表示されている内容と同じことを話しつつ、ときどき熊野の表情を窺う。どのくらい真面目に話を聞いているかと思ったが、目つきはしっかりとっていて、私の言葉と同じ部分に視線を走らせており、ちゃんと話を聞いているようだった。

「ここまでで質問はある？」

「現場作業って、具体的にどういう事ですか？」

「お客さんから連絡を受けて、現場に行ってトラブルの内容を聞いて対応するの。ハードの問題もあればソフトの問題もあって、基本的に私たちはどっちも対応するけど、あまりに専門的な場合や時間がかかりそうな場合は、ここに戻ってきて課長と対応を検討します」

「夏見さんがハードを弄っている姿って、あんまり想像つきませんね」

女が片手に工具箱一式を携えている姿を、彼は想像することが出来なかったようだ。

「もちろん私もドッペルを一から組み立てた事なんか無いわ。私が出来るのは簡単なことだけよ。でも、自分が出来る仕事の範囲を増やしていかないと、毎度毎度戻って対応を検討して、ってやっていると面倒になる。段取りをするだけでも時間がかかるからね」

「少しでも多く現場で対応した方が、こなせる依頼数が増やせるからですか？」

「そういうこと」

周りが騒がしくなる。ディスプレイの時計を見ると十二時になっていた。

「じゃあ一時までお昼ね。社外に出ても構わないし、ここで昼食を摂ってもいいから……」

あ、その前に連絡先教えてもらえる？ 現場でも離れて作業することもあるだろうし」

言いながら私は自分のスマホをポケットから取り出す。だが熊野は「すみません」と頭を下げた。

「僕スマホ持ってなくて」

「あら、ガラケー派？」

いまだき連絡アプリではなく電子メールを送らなければいけないのかと思うだけで、つい眉根が寄りそうになる。それにしても、これだけドッペルが普及している昨今、ガラケー派がまだ残っているとは信じられない。ドッペルを扱う上でも、連携アプリがあるスマホの方が断然いい。

「いえ、携帯とか持っていません。ドッペルも」

こいつは何を言っているのだろうか？ 理解できずに呆然とした。理解してから、自分の単純な理解が、事実と相違ないのか疑った。

ようやく、最初に熊野を見た時の違和感に気づいた。彼はドッペルを連れていなかったのだ。もちろん常に誰もがドッペルを連れて歩くわけではないが、最初に会社に入ってくるときには、大抵の場合は連れてくる筈だ。これが違和感の正体だったのだ。

だがドッペルだけならまだしも、通信機器すら持たないというのは異常すぎる。

「そう……買う予定は？」

「ありませんよ」

「仕事していると、無いと不便と思うでしょうけどね」

そうですかね？ と熊野は疑問を呈す。こんな無駄話をしている間にも、私のドッペルは昼であることを察して、オフィスの隅にある電子レンジに、クリームパスタの容器を入れてスイッチを入れている。

「普段からスマホを使っているから、無くなると不便を感じるんじゃないですか？ 普段は使っていない身としては、無いのが前提ですから、不便に思う事はありませんよ」

湯気が立ち上るパスタがデスクに置かれた。私は容器のフタを開けて、お手拭きの包装を破く。熊野はコンビニ袋を取り出して、おにぎりの包装を破いていた。

「ところで、スマートフォンってどういう意味ですかね？ 痩せた電話ですか？」

「いや『賢い』のスマートでしょ」

言い終わってから、プラスチックのフォークで麺を一口大に絡めて口に運ぶ。話しながら食べるのに、これほど最悪なメニューも無いだろう。

「賢い電話って変な響きですね。使っている人は賢いんでしょうか？」

「賢い道具に頼らないといけないほど、今の社会は高度化しているのよ。猫の手くらいじゃ役に立たないの」

「大変ですね」

「どうして他人ごとなのよ？」

「僕は高度な生き方していませんから」

なるほど確かにそうだろう。それほど電子機器から離れた生活を送っていれば、コミュニケーションをとる必要が無い、というより機会が無い。

煩わしさが無い点は、ほんの少し羨ましくも思わなくもないが、それより、ずっと薄ら寒さが勝った。文明社会に原始人が紛れ込んでいるようなものだ。そして何を間違ったか、そんなヤツが文明の利器たるドップルのトラブルに対応する仕事に就いてしまった。ドップルについての知識が素人以前の問題の人間が、どうやってトラブルの対応をするというのか？彼の社員としての資質に疑問符が付く。

しかしコミュニケーション能力という点については、それほど問題は無かった。声量は適正だし、自分の考えが無いということもない。逆におしゃべり過ぎて少々面倒なくらいだ。電子的な繋がりが無いぶん、実際の会話で埋め合わせようとしているのだろうか。

とはいえ、この会社の仕事は客と話して信頼関係を構築する仕事だ。ある意味おしゃべりも仕事の内だから、その点では適性があるのは認めよう。

だがやはり、メインであるドップルの知識がないと話にならない。話していく中で相手の意図を――例えばドップルをどう動作させたいかを汲み取り、相手が想像している通り、もしくは更に良い案を選択し提示するような能力が、この会社の社員には求められる。

果たしてこれから、一体どういう教育をしたものかと不安に思っていたところで、後ろから声がかかる。

「夏見さん」

振り返ると女性社員が立っていた。色黒な肌。黒い髪はショートカットにしているが、私より身体が華奢なので男性的ではなく、ボーイッシュな少女のような印象を受ける。久遠雛子という、ここでは四人しかいない女性社員で最も若い娘だった。口元が常に微笑んでいるように見えるからか誰からも好印象で、飲み会の席などでは皆から可愛いと言われ慕われていた。

「どうかした？」

私が応じると、久遠さんは淡々と応じる。

「さっき小出加工の高橋さんからお電話がありました。お急ぎの様子でも無かったので、今は出ているから折り返させると伝えました」

私が昼食を摂っているのを見てそうしたのだろう。小出加工の高橋さんは、頻繁に連絡してくる顧客の一人だ。大抵は「うまく動かない」か「ちょっと来てくれ」の二通りで、急を要することはまずない。昼休みに対応するほど切迫したものではないだろう。

「分かった、ありがとう」

久遠さんが自分の席に戻っていく。ふと私は周りを見渡した。

がらんとした仕事場で、白いマネキンだけがポツポツと立っている。ドッペルには労働基準法なんて適応されないから、昼休みの間にも作業させるのは当たり前だ。

けれど給料は支給されない。ドッペルによる仕事の成果は、使用している本人のものとして扱われる。会社が補助しているのは充電代くらいのものだ。ドッペルは人件費としてはカウントされない。税金その他諸々も考えなくていい。そして多くの仕事をこなしてくれる。

つまり単純な労働力という点において、ドッペルは人間よりコストパフォーマンスに優れている。

もちろんドッペルだけで仕事がこなせるわけがない。ドッペルが出来るのはあくまで規則性のある繰り返し作業だ。たとえば複雑な問題の判断など任せられるわけが無い。ドッペルが出来るのは、あくまで単純で時給的で数値化しやすい仕事だけなのだ。

けれど、と思う。そんな高度な判断が必要とされる機会は、これから増えていくのだろうか？ それとも減っていくのだろうか？ もし后者だとしたら、むしろ目の前に広がっている光景は、昼休みだけでなくなるのかもしれない。

昼休みが終わって、私と熊野は自動車に乗って現場に向かっていた。一件目は先ほどの小出加工である。運転は助手席に座るドッペルに任せ、運転席から後部座席にいる熊野に話しかける。

「仕事の内容としては、お客さんの話を聞いて、どんなトラブルなのか判断して必要な対応をするわ。部品の交換やトレースパターンの調整ね」

内容を簡単に説明しつつ、私はスマホをいじっていた。とりあえず少し時間が空いたらスマホを手にとるのは、現代人にとって息継ぎのようなものだろう。

「もちろん私もサポートするけど、とりあえず最初は出来るところまで一人でやってみて」

正直サボりたいだけだったのだが、熊野は躊躇うことなく「分かりました」と首を縦に振る。その根拠の無さそうな自信は、一体どこから来るだろうか？

小出加工は工場地帯の一番端にあった。他の工場に比べると敷地は狭く、せいぜいテニスコート程度しかない。

室内で目を引くのは部屋の奥にある大型の機械で、そこから手前にかけて大きなベルトコンベアーが設置されている。両脇に十台ずつドッペルが並び、流しそうめんの要領で各々が大型機械から生産される部品を拾い、確認し、ビニール梱包して段ボールに詰めると、外に待機している別のドッペルに渡す。外のドッペルが駐車場に停めてあるトラックの荷台に段ボールを積むというのが一連の作業の流れだ。

工場の床には砂埃など無く綺麗なもので、じゃりじゃりとした感触を足の裏に感じたりはしない。工場内のドッペルは必ず出入口で外のドッペルに荷物を渡すため、土足での出入り

が有り得ないからだ。必ず決められたトレースパターンを模倣するドッペルは、決められたルートだけを通る。人間のように「うっかり」や「面倒くさい」で土足のまま入ったり、上履きのまま出たりということはしない。こういう原則に生真面目なドッペルの導入でイレギュラーが排除されることにより、生産物の品質の向上に繋がっていく。

私たちは人間用の玄関口から工場に入って、待っていた高橋さんに挨拶する。その後、高橋さんに問題のあるドッペルについて話を訊くと、彼は工場の一番奥で手を止めているドッペルを指差す。

「昨日の夕方あたりかな、あいつの指の動きが悪くなってね。ちょっと前から部材を落とすようになっていたんです。失敗パターンに従って落ちた部品を拾っているし、ちゃんと部材の品質確認もしているのはログで分かっていたから、とりあえず様子見していたけど、昨日から全然ダメになっちゃってね……」

高橋さんは社内SEということになっているが、実際にはドッペルの面倒を見ているだけで、電子機器やシステムに関しては素人同然である。仕事でプログラム一つ書いたこと無いのに変な話だ、と以前来訪したときに愚痴っていた。しかし会社としては「ドッペルの面倒を見る立場の人間」が必要なので致し方ない。作業自体は機械に代替させても、トラブルが発生すれば誰かが対応し、場合によっては責任を取らざるを得ない。如何に人間の真似をするのが得意なドッペルでも、責任を取るというパターンは再現できない。

私は話を聞きつつ、そう高いレベルを要求される仕事ではないようだ、と察した。原因の解明だけなら、新入社員の最初の仕事としては必要十分、かつ無理のない難度である。

二十台ある工場内ドッペルの中で、トラブルになっているドッペルは一台のみ。となると一台だけが、他と違って何らかの異常をきたしているのは明白だ。

だがドッペルの知識が無ければどうしようもないだろう。熊野が立ち往生するのは目に見えていたし、そう長く意地悪はせずに教えてやるつもりだった。

だが、私の予想は裏切られた。

まず熊野は、ドッペルに失敗した一連の作業を再現させた。失敗したところ――部材を落としたところで作業を停止し、再び部材をつまみ、落とした部分のパターンを再現する。

次にドッペルの背中を軽く押す。外装がクルリとひっくり返って文庫本サイズのタッチパネルが露わになった。熊野はパネルを操作してログを確認する。どこに問題があるかを把握して、手首から先のカバーを外した。保護カバーを外すだけなら工具は必要ない。皮膚代わりの薄い甲羅が剥がされる。血管代わりの配線が走り回り、アクチュエータその他の内部構造が露わになった。

手首から先の機構を触るのは、他に比べて繊細さが必要とされる。熊野は工具箱から取り出したマイナスドライバーを指代わりにして配線をどけつつ、奥を眺めて原因を探る。親指を少しだけ分解し中身をチェックしていく。

「減速機の歯車のバックラッシュが削れていますね。まあ寿命でしょう。とりあえずはこの歯車を変えれば解決しそうです」

私のドッペルに持たせていた予備部品箱から、熊野は該当する部品を取り出して交換し、先ほどのパターンを再現する。すると今度は部品を落とすことも無く、本来の作業を遂行できた。

「流石カナダDTSの人は仕事が早いですね、新入社員だっていうのに手際も良いし。将来有望じゃないですか、夏見さん」

冗談めかして、高橋さんはそんなことを言う。

「有能すぎて、私の立場が無くなっちゃうかもしれませんけどね」

私にしては珍しく冗談を言ってみると、高橋さんは少し笑ってくれた。

「辞めさせられるのは嫌でしょうが、辞められないのも辛いですよ。俺なんか辞めるに辞められない」

「そうなんですか？」

「代わりがないんですよ。普段ここに詰めているのは、基本的に俺一人ですから」

それは大変そうだな、と私は少し同情した。今回のトラブルにしたって、最初から私たちを呼ばずにログの確認だけしていたのも、他の仕事が大変だから後回しにせざるを得なかったのかもしれない。

そのあと少し話をして、このドッペルは工場に配置された最初の一台であることが明らかになった。ちなみ親指は、ドッペルの故障部位でも上位に入る。それだけ作業時における使用率が高いということだ。

そこからは私も仕事をした。このドッペルはいつも機械の排出口に一番近い位置に配置されているため、作業量が他に比べて多くなっている。私は高橋さんにアドバイスした。

「回転寿司を想像してください。入り口に近い席だと好きなだけ取れますけど、遠い席の場合は、来るまでに無くなっていることが多いです。つまり入り口に近い位置だと必然的に作業量が他より多くなります」

よってトレースパターンを見直して、配置ごとに作業の速度や間隔を見直すか、毎日ローテーションでドッペルの配置を順番に変えることで、作業量が均等になるようにすべきだと助言する。本来なら部屋奥の製造機械そのものの排出量の問題だろうが、ドッペルサポートの会社の人間が口出しするのも変な話だ。

高橋さんは後者を選択した。前者の場合、トレースパターンの見直しは高橋さんの役目になる。そんな大変なことをするくらいなら、ローテーションのトレースパターンを組んだ方が楽だし確実だ。高橋さんに見送られて、私たちは小出加工を後にした。

一件目の対応が終わり、次の現場に向かう自動車の中で、私は素直に熊野を誉めた。

「思ったよりは詳しいのね、ドッペルの事。持ってないって言っていたのに」

「プライベートで持っていないだけです。ドッペルの事は高校で一通り勉強しました。部活で古い世代のドッペルを教材として使っていましたから、たいていの操作や分解は出来ますよ。卒業課題でドッペルに箸を使わせて豆を皿から皿に移動させる、とかやりました。古いタイプだったから精度も低くて、力の入れ加減とか調整して、失敗しないようにするのが大変でした」

あるある話の一つだが、それは専門分野の中での『あるある』だ。一般的なレベルのドッペルの知識や修理の経験は十分にあると考えていい。

「あそこ、雑な使い方をしていましたね」

「小出加工のこと？」

「あんな作業量の違いが出るような配置は、杜撰な運用でしょう。導入するとき作業量を先に見積もっておけばいいのに」

熊野の言う事は、プロ視点では尤もな意見だった。だからこそ、あえて私は反論する。

「ドッペルは予備知識が無くても使えるでしょう？ 人間がトレーサを付けて作業し、パターンを生成してドッペルに組み込む。それだけでドッペルは機能する。だからこそ、ドッペルについて深い造詣が無くても実用に耐えうる、耐えてしまうのよ。その弊害として、初歩的な運用ミスが出てしまうのは仕方がない。そこを……」

「そこをサポートするのが、僕らの仕事ですか」

私の言わんとしたことを熊野が引き継いだ。「そういうこと」と私は続ける。だが熊野は気に入らないのか、こんなことを口にした。

「夏見さん『人に授けるに魚を以ってするは、漁を以ってするに如かず』……って言葉、ご存知です？」

飢える人に魚を渡しても、その場しのぎにしかないが、漁を教えれば以後ずっと困らずに済むという意味の言葉だ。私に教えてくれたのは中学校の頃の国語教師だ。

「知っているけど、漁を教えるのは難しいし、相手も漁まで覚える気はない。なら魚を与えた方が、私たちも食いつぱぐれずに済むってものよ」

「身も蓋も無いですね。でも漁を知っている人間が皆で口裏を合わせて『魚を与えるのは止めよう』ってしておけば、彼らも漁の仕方を覚えようとしてくれませんか？」

それは良いな、と一瞬思った。専門知識を持っている人間からすると、初歩的なトラブルごときで現場まで駆り出されるのは、結構ストレスになるものだ。「こんくらい自分でどうにかしろ」と言いたくなる場面も少なくない。けれど私は首を横に振る。

「その時は、今までと変わらないか、ドッペルが使われなくなるだけよ」

つまんないものですね、と、つまらなそうに熊野は呟いた。

「子ども家庭支援課……？」

小難しい話が終わって少し経過してから、私は次の仕事の話を持ち出した。

「そう。市役所にある課ね。児童手当給付、幼稚園や保育園、認定こども園、小学校にある放課後児童教室の人材管理、児童虐待の相談や、母子家庭の自立支援金の給付をしてる。今回の相手は放課後児童教室ね」

私の早口な説明について訊き返すことも無く、熊野は疑問に思ったことを質問してくる。「それとドッペルにどういう関係があるんですか？ たんに役所内で使っているドッペルの不具合なら、市役所のシステム関係の課に話を通すのでは？」

「基本はそうだけど、放課後児童教室みたいに役所から離れた場所にドッペルがある場合、役所に出向かず施設を直接訪問するの。もちろん役所側に連絡を入れてからね」

「手間を省くためですか」

「そういうこと」

学校の敷地に入ると、来客用の駐車場に停車する。よく来るのでドッペルにも駐車パターンを登録していた。自動車を降りると学校の事務室で挨拶し、来客用のネック・ストラップを借りて首から提げる。本来、小学校と放課後児童教室は全く別の施設だ。具体的に言うと学校は文部科学省の管轄だが、放課後児童教室は厚生労働省の管轄である。が、同じ敷地内にある場合は学校側にも挨拶しておくのがベターだ。

駐車場の近くまで戻ると、ちょうど見覚えのある自動車が入ってきたところだった。停車した自動車から降りてきたのは、やはり知っている人だった。

「あら、ちょうど」

自動車から降りてきたのは、子ども家庭支援課の職員だった。三十代後半の女性で、名前は岸田さんという。

「こんにちは。お久しぶりです」

「お久しぶりですね。そちらは？」

岸田さんが素早く熊野に視線を向けると、熊野は自ら進んで名乗る。

「熊野といいます。今日から入社しました」

軽く挨拶を済ませてから三人で建屋に歩いていく。建屋は防音仕様の筈なのに、外からでも微かに喧騒が聞こえてきた。私は中の様子を想像して、ドッペルに入り口の前で待機するように命じる。あまりに人の多い場所だとドッペルは邪魔になる。

「今日はまた、一段とうるさいわね」

岸田さんが溜息を零した。扉を開けた瞬間、音量が数倍増しになった。私たちは挨拶をしたが、圧倒的音量によって無情にも掻き消される。

中は混沌の様相を呈していた。五〇平米は有りそうな床の上で、私服姿の子供たちが走り回り、歩き回り、座りこんで遊んでいる。六〇人はいるだろうか？ キャッキャという可愛いものではなく、ジェットコースターに乗ったときのような絶叫に近い。それが十重二

十重と折り重なり、小出加工以上の騒音になっていた。

男児の元気の滲刺さは誰でも想像がつくだろうが、女児も勝るとも劣らず、どちらも低学年には特有の甲高い叫び声で大人たちの耳を容赦なく蹂躪する。

足先に何かがぶつかりそうになる。ふと足元を見ると女子児童が転がってきていた。体格的に三、四年生くらいだろうか。この年齢になったら、もうちょっと落ち着いていそうだが、来訪者に対して羞恥心など欠片も見せずに、笑いながら床の上を転がりまくって引き返していく。

私は何度か見ている光景だが、熊野にはインパクトが強すぎたらしい。軽く口が開いたままになって塞がっていない。

「こんにちはー」

子供たちに囲まれていた一人の女性が、私たちに気づいて立ち上がる。顔の皺を見るに七十歳に近そうだ。

「ああ、岸田さん、夏見さん」

「相川先生、こんにちは。相変わらず皆は元気そうですね」

岸田さんと相川先生が互いに頭を下げる。私も軽く会釈をする。顔見知り程度の関係性なので、やはり岸田さんが間に入ってくれと話が早い。

「そちらの男性は？」

私が応じようかと思ったが、熊野が先に頭を下げて名乗った。

「夏見さんの部下で熊野といいます。なんだか幼稚園みたいですね、ここ」

なんて失礼なことを言うのだろうか、こいつは。だが相川先生は気を良くしたらしく、大袈裟に笑った。相川先生の気持ちを岸田さんが代弁する。

「幼稚園より性質が悪いですよ、こっちの方が体力も腕力もありますからね」

「それに先生の数も足りていませんしね」

ひとしきり笑い終えた相川先生が割って入ると、岸田さんも笑った。女同士、それも仲のいい間柄だと、とにかく笑いが絶えないのだ。

「なにそれ、人増やしてってアピール？」

「え？ そう？ そう聞こえちゃった？」

岸田さんと相川先生が二人で盛り上がる。役人同士というよりも、おばちゃんとおばあちゃんの井戸端会議のノリだ。まだこの輪には加わりたくはないかと、自分の中で若さを求める声が上がった気がした。

「人手は足りてないんですか？」

熊野が尋ねると、岸谷さんは「もちろん」と言う。

「年中そうですけど、今みたいに夏休みだと特にそうですね。一日中預かっていますから。でも大人は一日中いるわけには、いかないでしょう？ 体力的に無理がありますから。ドッ

ペルも増やした方が良いかなあ……」

「いえいえ、子供の相手をしてくれるだけでも、十分助かっていますよ」

相川先生の視線の先にはドッペルがいた。白いマネキン子供たちに取り囲まれて、オセロや将棋盤と睨めっこし、百人一首のカルタをスピーカーで読み上げ、時には腰に飛び付かれてバランスを崩しそうになっている。

「あーあー、あんなことされたら、そりゃ壊れますね」

悲壮感に満ちた声で熊野が言った。機械は子供に遊んであげるが、子供は機械に優しくない。

これほどパワフルな子供たちを見守るために、人間の職員には相当の体力が要求される。しかし現場の実情は、定年退職した元教師の女性が先陣を切り、続くのは少し若い主婦世代だ。男性や若者は極端に少ない。とはいえ夏休みの短期バイトで増員しているらしく、高校生くらいの女の子が一人いた。遊んであげているというより、もみくちゃにされていた。座った状態で男の子のオセロの相手をし、両腕を別の子供らに引っ張られ、後ろから三年生くらいの女の子が、女子高生の長い髪を三つ編みにして遊んでいる。そんな惨状から目を逸らし、私は本題に入る。

「それでドッペルの話ですけど……」

「ああ、そうでしたね」

岸谷さんが三台あるうちの一台のところに歩み寄り、ドッペルと遊んでいる子供たちに声をかける。

「ごめんね、ちょっと壊れているか見てもらうから、少し貸してね」

頷くが早いか、子供たちは別の遊びにシフトしていく。遊ぶことに関していえば、切り替えの早さは大人の比ではない。

「最近、座った状態から立ち上がる時に調子が悪くてね、ふらつくこともあるし、どっか壊れているんじゃないかと心配で……」

相川先生から詳しく話を聞くに、どうやら胴体周りの動きに違和感を抱いたようだ。曲がりなりにもSEである小出加工の高橋さんと違い、ドッペルに疎い相川先生や岸田さんではログの見方も分からないだろうから、早期に私たちを呼んだのは正解だろう。

ドッペルの背面を開けて画面を操作してログを確認する。大したことないだろうと高をくくっていたが、かなり深刻な警告が羅列されていた。

「こりゃ、分解した方がよさそうですね」

横から画面を見ていた熊野が言う。と言っても、子供たちが走り回る場所では解体も出来ない。ドッペルを部屋の外に出して、廊下の端で作業を始める。

ドッペルの電源を切り、ゆっくりと横に倒す。ドッペルも登場してから毎年改良されているため、その重量は当初よりだいぶ軽くなっている。今では人間よりもずっと軽い。とはい

え転倒して人にぶつかったら怪我は免れないし、軽量化したことで逆にこけやすくなったという話も聞く。

専用の工具を使って胴体のカバーを外す。機械の腸が露わになる様はグロテスクな外科手術のようだが、やっていることは診察である。人間は病気の可能性があるからといって、ちょっと腸を搔っ捌いてみましょうね、というわけにはいかない。その点、ドッペルは不具合を看てもらふ素質も優れている。

熊野が主要な部分を点検している途中で、悲鳴に近い声を上げた。

「うわ、アブソーバーが死んでいますよ、これ」

直径二センチ近い金属棒に大きな亀裂が走っていた。スプリングも歪んでオイルも漏れている。かなり危険な状態だ。アブソーバーは外部からの衝撃を吸収してドッペルの体勢を維持する部品だが、このように破損していると衝撃を吸収しきれずに転倒し、大事になりかねない。

「アブソーバーなんてあったかしら……ちょっと自動車のトランクを見て来るから」

胴体のアブソーバーは、予備部品箱に入るような小型のパーツではない。もしかしたらトランクに積んである大箱の中にあるかもしれない。私は駐車場に戻ってトランクの中身を確認するが見当たらなかった。これは持って帰って修理するしかないだろう。

岸田さんと相川先生にその旨を伝える。修理の間だけ、ドッペルをレンタルしましょうかと伝えるが、一日二日なら大丈夫ですと断られた。逆に言えば、三日後までに直してほしいという遠回しな要望である。

熊野に指示して、ドッペルを後部座席に積ませる。その間、私は岸田さんと相川先生の話聞いていた。

「そういえば村上君なんですけどね、ここ最近、ずっと送迎がドッペルなんですよ」

「あそこのお母さんは仕事が夜ですからね」

二人の口調からすると、少し問題のある家庭のようだった。

「迎えに来ないよりはマシですけど……若いお母さんの考えることは分かりませんねえ。私の世代じゃ考えられません」

「いつごろからです？」

「それがもう、夏休み入る前からずっとなんです。家で……その、色々暴力とか振るわれている様子も無いですし、服も毎日変わっていてお風呂にも入っているようだから、下手に口を出すのもおかしい話かなとは思いますが……」

電子機器など馴染みの無かった子供時代を過ごした職員からすれば、ドッペルに子育てを委託する考えに戸惑うのは、無理のない話と言えた。まして見知らぬ子供ではなく、自分が一日預かる子供なのだから猶更である。

子供を預かるこの仕事は、現場も役所も、お金を稼ぐためではなく慈善事業だという。五

十人いる児童一人当たりの一カ月の利用費は数千円、対して職員は一日あたり四、五人で一人当たり時給九〇〇円程度、労働時間は午後一時から午後六時までの五時間。運営費となる水道電気代諸々を含めると、元を取ることすら難しい。

システム面でも現場においても慈善的で、特に高年齢な職員にとってはライフワークに近い。だが子供を預ける保護者の中には、単に子供を預かってくれればいい、という人もおり、そこに意識の違いや軋轢が生じる。

だからこそ私は思った――服を変えたり風呂に入れたり、よほど子供が反抗的でない限りは、そういった子供の生活の補助もドッペルに委託することが可能だということ。そして稀に職場で聞くに、実際にそういう使い方をしている人もいる。食事だってドッペルが作れる。現に私も三食全ての用意と片付けをドッペルに委託しているくらいなのだから。

そういった事情で、身なりなどから子供の家庭環境を判断するのは難しくなっている。見た目での判別は、所詮は己の常識に照らし合わせた楽観論だ。やはり子供と直接話をしてみないことには、実際のところは明らかにならない。

とはいえ、おせっかいな職員たちのことだから、すぐ実情は明らかになってくるだろう。しかし分かったところで、ドッペルに子供の世話をさせている以上、育児放棄と呼べるかも難しいところだ。どちらにせよ私が口を出すようなことでもない。

「ドッペルで送迎する親は、放課後教室では珍しいんですか？」

そう思った矢先に、何を思ったか駐車場から戻ってきた熊野が口を挟んだ。

「珍しいというほどでもないんですけどね」

「それにしても毎日が多過ぎると？」

「そうなんですよ、それも一カ月近くずっと。たまにとかなら分かるんですけど、あまりに多すぎやしないかなって」

「普通は気にしそうなものですけどね」

「そうでしょう？ やっぱり変ですよねぇ」

若者である熊野に肯定されて、相川先生は若干饒舌になっていた。露骨になりすぎないように相手を肯定することで、信頼関係を構築していく熊野の手腕に、私は舌を巻いた。

「そりゃ変ですよ。仕事が忙しいにしても、ちょっと抜けて来るくらいは、できるでしょうに……」

「そうでしょう？ ちょっとの間だけなら仕方なく使うこともあるかもしれないけど、一カ月ずっとなんてねぇ」

同じ話が繰り返している気もするが、年寄りとの会話はこんなものだろう。というより、人間の行動は、案外こんなものかもしれない。

話を聞いていて、どちらかというと私は二人の考えには否定的だった。同じことの繰り返しを代替するのがドッペルの本業だ。むしろ数日だけ、例外的に使う方がドッペルの扱いと

しては変な話だ。

その点だけ見れば、ずっと送迎に運用し続けている村上君とやらの母親は、正しくドッペルを使っていると言える。人間性や親としては若干の疑問が残るが、それはまた別の話だ。

「送り迎えの途中で故障したら、不安になるでしょうに」

「そういえば、夏休み入る前だったかしら……ドッペルが一度こけたとか言っていたかも」

「心配ですねえ」

「本当、そうなんです。修理してもらったよ、って村上君は言っていましたから、一応は気にかけているんでしょうけど、ロボットに気をかけるくらいなら、子供に気をかけてやればいいのに……」

仕事の傍ら子供の面倒を見るために、ドッペルを気にかけないといけない大人も大勢いるだろう。もしかしたら村上君の母親もそうなのかもしれない。夜中だけでなく昼も働いている可能性はある。放課後児童教室では、希望者の人数が定員以上の場合、児童の家庭環境などで利用可否を判断されるが、一人親の場合は条件的に有利になるのだ。他にも学年、親の労働時間や勤務時間帯、収入、祖父母が子供の面倒を見れるか、などの様々な項目が含まれる。つまり子育てにドッペルを使わざるを得ないような家庭環境の子供ほど優先して入室できるのだ。

システムを利用するためには、システム側に個人情報を明け渡す必要がある。だがシステムを運営するのも所詮は人間だから、相川先生のように利用者に対しては理解が及びきらないこともあり、こうして現場では不平が出る。

逆に親は親で、現場の先生の事など分からないから、何かトラブルがあると不満が発生する。自分の子供がトラブルに巻き込まれたら、放課後教室ではなく、役所に直接連絡を入れる保護者もいるという。利用する保護者側と運営する先生側、相互の理解が十分とは言えない。

もしも、と思う。もしも放課後教室の運営を完全にドッペルで行うとしたら。そんなバカげた話を考えてみる。マンツーマンで個室管理すれば、子供同士の喧嘩のようなトラブルが発生する確率は大きく減らせる。送迎も全てドッペルでやれば、働いている親が子供を迎えに行くのが遅くなるといった問題も解消される。ドッペルでの運営なのだから、人員不足や人間性による軋轢などのトラブルも回避できる。電気代こそかかるが、それは人件費が取って代わっただけの話だ。

ことシステムを日常的に運営し管理するという点において、昨日の真似をしようと頑張る人間より、確実にトレースできるドッペルの方が達者だろう。昨日と同じ今日なら、トラブルの発生も抑えられる。メンテナンスさえ怠らなければ問題ない。工場をほぼ完全にドッペルで管理した、小出加工のように。

熊野のせいで気になってしまった。

会社に帰ってくるなり、私は社内システムを立ち上げて顧客リストを検索する。カナダDTSでは、企業だけでなく個人の利用者が相手に商売をしている。私のような重度のドッペルユーザーの場合、トラブルに遭遇する確率は高い。そうなった時はドッペルのサポート会社を頼ることになるだろう。

この営業所の顧客に『村上』という名前の人物は三人もいた。そのうち七月に対応していたのは二人で、一人は高齢の男性なので消去法で一人に絞られる。住所も小学校の校区内だし、まず間違いない。

レポートを調べてみる。我が社では現場で対応するたびに、対応時の簡単なレポートをデータに残すことが決まりになっていて、社員なら誰でも閲覧できる。対応したのは田崎さんだった。この五日間、出勤拒否している男性社員である。

ドッペルが転倒したのも運だし、さらに村上さんがトラブル対応に我が社を頼ったのも運だった。村上さんのドッペル任せと、田崎さんの出勤拒否……ここまで偶然が重なると、何かしら因果関係を証明したくなる。

最初に疑ったのは、田崎さんと村上さんの間に何か問題があった可能性だが、これは考えにくかった。田崎さんが休み始めたのは五日前、対して村上さんの件は二週間以上前からである。それ以前……一年以上前から、村上さんがトラブルに遭うと、毎回田崎さんが対応している。今までの鬱憤が蓄積して爆発した可能性も考慮したが、やはり二週間前と五日前のタイムラグは無視できない。

では、何が理由なのか？　こうして気にするのは単なる出歯亀精神ではない。以前から、他の営業所の顧客対応レポートと比較していて、気になることがあったからだ。

三日後、修理の終わったドッペルを届けるため、私たちは再び放課後児童教室を訪れた。

この三日で、すっかりドッペルサポートの仕事が板についてきた熊野に、動作確認テストと称して子供の相手をさせておく。修理の終わったドッペルは、さっそく子供たちに取り囲まれて遊び相手をさせられていた。熊野が「ドッペルに手荒い真似はしないで」と懇願し、その哀れさに同情した子供たちは仕方がないとばかりにドッペルとの卓上遊びに移行していた。どうやら彼のコミュニケーション能力は、老若男女を問わないようだ。

「そういえば……前に話していた村上さんの件、どうなりました？　あれから親御さんは来られましたか？」

私の問いに、相川先生は首を横に振る。

「いえいえ、全然です。連絡帳にそれとなく書いてみたんですが無反応で……」

「その村上さんなんですけど、どうもウチの会社のお客さんみたいなんです。昨日、偶然気が付まして」

「あら、そうだったんですか」

「そういえば、この辺でドッペルの修理をしている会社って、カナダさんのところくらいですもんね」

相川先生は驚き、岸田さんが補足する。私は意を決して、できるだけ口調が堅くならないように努めながら、本題を切り出した。

「もしよければ、これから用事があって村上さんのところに行くので、少し様子を見てきましょうか？」

岸田さんと相川先生は目を合わせる。

「いいんですか？ そんなこと頼んでも……」

「ええ、安心してください、お金は取りませんから」

らしくもない愛想笑いを浮かべてみるが、話の深刻さからか、二人は曖昧な笑みを浮かべるだけだった。

「ウチも理由もなくお家を訪ねにくいので……利用料を滞納しているとか、理由があれば別なんですけど、村上さんは毎月、振込日までに支払ってくれていますし。とはいっても、こちらからお願いするわけにはいきませんし、なんとなく話を聞いていただくだけでも助かります」

岸田さんは、わざとらしいまでに私に視線を合わせる。含むところがあつての事だとすぐに察する。ようするに深入りし過ぎないでくれということだ。二人の「気になる」は本心だろうが、職場のルールがある以上、この段階で実際に手を打つのは大袈裟すぎる。誰だってちょっと気になることがあるからといって、他人にスパイじみた真似をさせたくはないだろう。

勿論私も深入りする気は無かった。今回の行動だって、仕事上ではかなりのグレーゾーンに入る。職務中に得た情報を第三者に漏らすのは社内規則に抵触する。今回の場合、両者が知り合いだからこそ、一般常識の範囲内なら許されるだろう、という憶測に過ぎない。この一般常識という曖昧な言葉を、どれだけうまく使いこなせるかが重要だった。

だから私は事前に二人に話をしたのだ。少なくともこれで、仮にこの件が問題になった場合、私個人に悪意があつて村上さん宅を訪問したわけではないと言い訳が立つからだ。単に、おせっかいが過ぎたと思われるだろう。我ながらセコい予防線である。

放課後児童教室を後にして、私たちは村上さん宅まで向かう。カーナビと基本運転のトレースパターンをリンクさせれば、初めて行く場所にもドッペルで行くことができる。

ドッペルを利用し始めた当初は、通勤のように毎度同じパターンならともかく、初見の利用で使うのは事故が怖くてやっていなかったが、三年も経つと『初めて行く場所でもドッペルに運転を任せて実用に支障が無い』という意見がネット上で見られるようになり、いつの間にか私も使い始めていた。

ドッペルは繰り返しを担当する存在だ。だから毎日同じ道を往復する通勤はドッペルの領域でも、タクシーのように違う場所に行くことまでは想定されていなかった。しかし需要があり、それを実現できる技術が重なった結果、ドッペルに求められるようになったのは完全に同一な運転の繰り返しではなく、変数を含みながらも観念的に同一なものとしての運転、すなわち常習的な生活の一部としての運転になっていた。

理想を実現するために用いられた技術が、想定以上に高度であれば、人は更にその先の理想を見出していく。ようするに業突く張りだ。技術が先立てば目的を拡張する。目的を掲げると実現するための技術が追いつき、更に新たな目的が掲げられる。人間はそうやって進化を繰り返す。人間の進化が止まらない、というより止められないのは、辿り着いたその場所からは、新たな地平線が見えてしまうからだ。

「そういえば、自動車の免許も持ってなかったんだっけ？」

私が尋ねると熊野は「ええ」と返答した。ドッペルによる自動車運転を行う資格があるのは、普通自動車免許を持っている人間に限られる。ドッペルは必ず助手席に座らせなければならない、運転手は常に運転できる態勢でいることが義務付けられていた。とはいえそれも形骸化してきており、運転中に寝ている運転手も多い。私もたまに寝ているほどだ。

「スマホもドッペルも自動車も持たない、なんだか時代を逆行しているわね」

「自動車は今、減っているんでしょう？ 時代の流れの通りですよ」

心外だと言わんばかりに熊野は反発した。

「それにしたって無くなるほどじゃないでしょ？ なんてそんな時代を逆行するの？」

「逆行しているわけじゃありませんよ。単に世の中が外部に頼りすぎているだけで、自分はそういうのを疑問に思うだけです」

外部、とは何のことだと思ったが、彼の行動を鑑みれば、なんとなく分かる。

「コミュニケーションにスマホを、生活にドッペルを、移動に自動車を……そうやって、なんでも道具に頼りすぎるのって、不気味じゃないですか？」

不気味という表現に、私は思わず吹き出しそうになる。あまりにアナクロな彼の精神は、まるでタイムスリップしてきた昭和初期の人間みたいだ。

「正しく使えていればいいんじゃないの？ 何の道具も使わない生活も難しいでしょう」

「正しい使い方って、誰が定義した使い方なんですか？」

ほんの一瞬だが、私は考えがまとまらなかった。

「そりゃ……道具を作っている人とか、一般論とかじゃない？」

「昔、アスベストってあったじゃないですか、あれだって最初の頃は『奇跡の鉱石』って言われて使われたんでしょう？ ティラノサウルスだって、羽毛で覆われていたとかいないとか話題になったじゃないですか。この世にある正しさは、大抵は暫定的ですよ」

正直に告白すると、私は生まれてからの二十八年間、正しさという観念について真面目に

考えたことなど無かった。だから私は次に何か言うまでに、相当な秒数を必要とした。

「つまり……ドッペルが普及している正しさも、暫定的なものだって言いたいのか？」

「ええ。もちろん本当に『正しい』のかもしれませんが。正しさは変遷していくって話です。たとえば、ドッペルが今より認められたら、いま夏見さんは運転席にいますけど、未来では助手席でもよくなるかもしれません」

なるほど、と私は納得した。

「今は運転席にいないと、いざって時に交通事故になりかねないから、フェイルセーフとしての意味がある……」

「けどドッペルに合わせた道路舗装なんかが取り入れられて『基本的には大丈夫』ってことになったら、そういう事もあり得る気がするんですよ。自動運転は危ないと言いますが、手動運転なら安全ってわけでもありませんし」

熊野の例は極端だし、私もそれを承知している。デジタルとマニュアル。現在では二つのシステムを並列させることで、利便性を高めつつも安全性を確保している。

熊野の言う道路舗装が極端なものになれば、自動車自体も合わせて改造されるだろう。例えば路面電車のようになる可能性だ。そうなれば今ある『自動車』という形は、日常的移動手段から追いやられることになる。

もしくは通勤や輸送など、今まで人が必要とした移動自体が、消失してしまうかもしれない。日常的な移動が無くなれば、当然、交通事故なんて起きないのだから。

そう考えると身近には、疑問点が多くある暫定的な正しさがいくつもある。

たとえば『子供を育てるのは親や人間がやるべき』という観念だって、その一つだ。もしそれも暫定的な正しさなのだとしたら、村上さんは時代の先駆者ということになるのだろうか？

「そういえば、村上さんと連絡できたんですか」

熊野が現実的な話題に切り替えてきたので、私もそれに合わせる。

「ええ、ドッペルのメンテナンスってことで話を付けたわ」

昨日、三度ほど電話をかけて、ようやく連絡がついてアポが取れたのだ。ちなみに田崎さんについては体調不良ということにしている。実際、そういう名目で休んでいるのだから、完全なデタラメでもない。

住宅街に入るとドッペルは自動車を徐行させる。目的の村上家は住宅街にあるアパートの三階だった。新しいアパートだが庭は広く、とりあえずここに駐車しても大丈夫だろう。

私と熊野はドッペルを連れて降り、目的の部屋の前でインターホンを鳴らす。

「カナダD T Sの夏見です。村上さん、いらっしゃいますか？」

少し間があって、スピーカーから声が聞こえた。

『はい……何か？』

「昨日連絡した件で、少しドッペルを検査させて頂きたいのですが……お時間大丈夫でしょうか？」

『今からですか？』

アポを取っていたというのに、村上さんの反応は驚いているようだった。

「出来るだけ早急に対応しないと、ドッペルに不具合が起こる可能性があるんです。製造会社側の部品との整合性不具合ですから代金は頂きませんし、お時間も取らせませんから」

スピーカーの向こう側から、小さく溜め息が聞こえる。仕方がないなとアピールしているようだった。

『いいですけど……いま私、家にいないんです。玄関からドッペルを出しますので、少し待ってもらえますか？』

インターホンとスマホをネット経由でつないでいるようだ。子供の送迎をドッペルにさせたり、アポイントを取るのが難しかったのは、ずっと外出中だったからだろうか？

「ありがとうございます」

数十秒とせずに入り口からドッペルが出てきた。スキンカバーの色は白ではなく薄いピンク色だった。色が違うだけでスペックの違いは無い。

『終わったらインターホン押して下さい、私に繋がりますので』

「分かりました」

それきり、スピーカーから音はしなくなった。私は作業に取り掛かろうとして、ふと気づいた。よく考えればインターホンなど使わずとも、スマホに連絡するだけで済む話ではないか。

いや待てよと思う。インターホンのカメラ情報も転送されるのだとしたら、その意図は明白だ。こちらを信用していないからカメラで撮影して、いざという時の証拠として残しておきたいのだろう。

田崎さんが休んで別人が来るという状況に、何かしらの警戒心を抱いたのか。とはいえこちらは撮影されたところで問題は無い。

私はドッペルの背面をひっくり返し、タッチパネルを操作しログを確認する。

ログ、つまり履歴というのは、詳しい情報が記載されているほど、トラブルが起こるまでの過程を正確に追跡することができる。が、ある種の『悪用』をしようと思った場合、これほど便利な代物はない。

特にドッペルの場合は顕著で、プライベートな情報の宝庫だ。タイマー起動されたパターンや、割り込み依頼されたパターンの頻度などから、ドッペルの利用状況が分かる。つまりドッペルに依存していればしているほど、その人の生活が見えてくるのだ。

たとえば私の場合、ドッペルは私が朝起きる時間に合わせて朝食の準備をする。仕事に行くために通勤パターンが呼び出される。朝食のメニューによって調理時間が分かるから、更

に食事する時間などを差っ引けば、私の朝の生活リズム——何時に起きて、いつ朝食を食べて、着替えて、家を出るか——が大体わかってくる。これがアルバイトの場合は、曜日や日付によるパターンのズレで、シフトなども把握できる。

そういう点で見ると村上さんのドッペルのパターンはリズムが整っているのも、いつもの生活が丸わかりになるレベルだった。

しかし……。

「おかしい……」

すぐに私は気が付いた。衣食住の全てがドッペルに依存している。この二ヶ月は顕著だ。とはいえ、そんな墮落っぷりは私も同じなので指摘できる立場じゃない。問題は、作業をこなした量である。調理時に使った材料の分量、センサが感知した洗濯物の重さ……それが明らかに少ないのだ。

村上さんは母子家庭で、村上君との二人暮らし。だというのに洗濯物や料理の分量が成人一人分に満たない。これが意味するところは、村上さんは二ヶ月以上自宅にいないか、ほとんど自宅にいないも同然の状態であるかだ。

村上さんが誘拐・監禁・軟禁されているとも考えにくい。子供が普通に学校に通っているのだから辻妻が合わない。それに誘拐監禁されているのに、ドッペルのメンテに応じられるとも思えない。

ならば原因は村上さん本人にあるはずだ。彼女が何を思って家を抜け、他の場所にいるのかは知らない。問題はそれを隠し通す意図があるかだけだ。

私はインターホンを押す。村上さんに繋がり、スピーカーから声が出力される。

『終わりましたか？』

「ほぼ終わったんですが……少しお伺いしてもよろしいですか？　最近は調理で、どのくらいの頻度でドッペルを使用していらっしゃいますか？」

『……それ、なんか関係ありますか？』

「外装は耐熱効果がありますが、使用頻度で寿命も変わってきます。なので確認しておきたいと思ひまして。料理している時間や、何人分作っているかも教えて頂けると助かります」

私のデタラメに対して、少し間をおいてから返答があった。

『毎日使ってはいますけど……子供の分は作らせてますが、自分の分はコンビニで買ってます。コンビニには自分で行ってます』

嘘だ、と私は直感した。子供の料理だけドッペルに作らせて、自分の分だけ買いに行くなんて、どう考えてもおかしい。主婦なら手間を省いて二人分調理するだろうし、本当に余裕が無いなら互いにコンビニで済ますだろう。だから村上さんは子供にはちゃんとしたものを食べさせて、自分はコンビニで済ますという意味不明な利他精神を、二ヶ月も続けているとは考えにくい。

だが、この場で指摘するのは躊躇われた。相手の言葉は明らかにログとの整合性に矛盾が起きないように建前を口に出している。これ以上警戒させて、どこにいても知れない村上さんに雲隠れされたら目も当てられない。

「そうでしたか、ありがとうございます。ドッペルについて問題は無いようでした。お時間を取らせて申しわけありませんでした」

『いえ……じゃあドッペルを家に入れてもいいですか？』

「どうぞ。私たちもこれで失礼します」

言い終わるが早いか、ピンク色のドッペルが室内に入り、しっかり電子ロックで施錠された。

「ドッペルだけを残して、ほとんど家に帰ってないみたいね」

車内に入るなり、出し抜けに私は言った。熊野も思ったことを口にする。

「意味分かりませんよね。子供とドッペルを置いたまま家を離れるなんて、危ないでしょうに」

常識的に考えれば熊野の意見は正しい。ドッペルの存在価値とは、面倒な日常のループの一部を委託することだ。子育てという、人にとって最も重要な、職よりも大切な仕事を完全自動化するなど、たとえ合理的であったとしても、普通の親ならやるはずがない。

だがそれは常識の中での話だ。孤独な当事者にとってはその限りではない。毎日毎日、宿題をしない我が子を叱りつけたり、子供に合わせた味の食事を用意したり、外遊びで泥だらけになった服を洗濯する生活を、ある日ドッペルに託してみたら、まったくストレスでは無くなった……。

人がやっても機械がやっても、出来てしまえば同じこと。むしろ仕事にストレスを感じずに、人間より動作の早いドッペルがやった方が合理的だ。それが我が子の遊び相手だとしても。我が子の汚れた衣類の洗濯だとしても。親が自ら子供を育てることに、どんな合理性があるというのか？

夫や親戚に相談したところで、自分のストレスが軽くなるわけではない。まして適当にあしらわれるだけなら、もっとストレスが溜まるだろう。休日、子供が泣いているときに、平和に寝ている旦那を見れば、殺意が湧くのも頷ける。

そんな切迫した精神状態で、惨劇に走らず、ドッペルに委託するのは、まだ平和的な妥協ではないだろうか？

とはいえ、そんな話を熊野にしても反論されるだろう。そして私はなんとなく納得してしまいかねない。舌戦で熊野に勝てないのは、この数日で思い知った。だから私は逃げに転じる。

「それも変だけど、あの人自身はドコにいるのかしら？ ビジネスホテルにでも泊まってる

わけでもないでしょうに……変な話ね」

「それを言ったら、事前に連絡したのに家にいないのも、連絡したのに驚いているのも変じゃないですか？」

家にいないのはともかくとして、驚いているのは確かに変な話だった。ドッペルサポートの会社の人間が訪問したら、何か作業をするとすぐ考えそうなものだ。個人の場合は基本的に契約料金が発生したりもしないから、そういう手続きをしにくくとは考えないだろう。するとあの驚きは演技で、出来るだけ私たちを早く帰らせたかったと考えるのが妥当だ。

「話は変わりますが、僕が結婚するなら、ああいう人とは結婚したくないですね。やっぱり人間を育てるのは人間がやらないと」

人間の話になると妙に饒舌になる。ここ数日で知った熊野の性質だった。

「やっぱり女性にも、そういうのを求めるわけ？ アナクロ気質なところとか」

「あんまり考えたことはありませんけど、そうじゃない人とは気が合わないだろうなとは思いますが。……そういう夏見さんは彼氏いるんですか？」

人には訊いておきながら、自分は応じないというのはフェアじゃない気がする。

「二回だけね。一人目は職場の先輩。二人目は友達の知り合いだった」

「一人目と二人目は、似たような人だったんですか？」

やけにガツガツくるな、と思ったが、熊野が相手だからか、つい舌が回ってしまう。

「全然違ったわよ。一人目は一緒に仕事をしていた先輩だったけど、向こうが転勤になって別れた。二人目は家によく来たし、家庭的な人だったかな……ま、結局は別れたけど」

そういえば、彼はトレーサを付けて料理もしてくれた。君も料理は出来た方が良い、みたいなことを言って、そのトレースパターンを、当時まだドッペルを持ってなかった私にくれた。今では休日に使うこともある。

「それってフットなんです？ フラれたんです？」

よくもまあ、こうもずけずけと訊けるものだ。一瞬だけ、先輩の顔が脳裏をよぎり、鳩尾当たりに鈍い痛みが走ったような気がした。

「一人目はフラれたことになるのかな。二人目は……どうだったかな？」

二人目は、あまり印象に無くてよく覚えていない。

一人目……先輩の事は、私にしてはよく覚えている。もう七年近く前になるのに、だ。

ある日、人事異動が社内ネットの掲示板に張り出された。関係ないだろうと私は高をくくっていたけれど、現実には非情にも先輩の異動を示していて、流石は出世頭、と西谷課長はひどく喜んでいて。

もちろん個人の都合が悪ければ、断ることもできなくは無かっただろう。けれど先輩はそれを選ばなかった。私は自分が見捨てられた気がした。

次の休日に先輩の部屋で、別れよう、と告げられた。うんと言って、今までありがとう、とだけ続けた。視界が白くなっていたけど、それは涙のせいじゃなくて、動揺して血圧が急激に変化したせいだと思う。

それまでのことで、なんとなく先輩が私と一緒にいても居心地悪そうにしていたのを察して、これがトドメになったのだな、と悟った。家に帰ってから少しだけ涙が零れていた気がする。

ちなみに先輩は異動して一年もせず、この会社を辞めた。

私はというと、その事実を聞いて、少しスッキリしていた。今度顔を合わせた時に気まずいだろうなって考えなくていいんだな、と。ふと気づいてみれば、先輩に対する恋慕は霞のように消え失せていた。

「っていうか何？ そんなことまで訊いてくるなんて。私に気でもあるの？」

そろそろ話題を終わらせたくて、私は茶化してみる。

「いえ、俺はタバコ苦手なんで、正直遠慮します」

一瞬、何を言っているのか分からなかった。そして気づいて驚いた。車内でタバコを吸ったことは無い。吸い殻入れも綺麗なはずだ。

「私がタバコ吸ってるなんて話したっけ？」

「会ったときから分かりましたよ。タバコ吸ってる人だって」

「匂う？」

一応は無香の消臭剤を使っているのだが、分かる人には分かってしまうらしい。

「普通の人には分からないと思いますよ。僕、子供の頃に医者に言われたんですよ、キミは鼻が過敏だねって」

「それ、そういう意味なのかしら？」

何かのアレルギーを示している気がしたが、とうの熊野は「どうでもいいです」なんて関心の無い返答をするだけだった。

私たちが職場に帰ってきたのは午後四時だった。我が社はホワイトな企業なので、一時間後には帰宅の準備が始まってしまう。

とりあえず私は今日の請求書と見積書の取りまとめに掛かった。我が社の場合は客先に訪問したら、すぐに対応しないと客が困るので、書類は後回しになるのが常だった。作業が終わった後に請求書と一緒に見積書を書いて体裁だけ整えるのだ。必要な部分の記入が抜けていないかを確認して、総務のところに持っていく。

「久遠さん、これ」

私は久遠さんに声をかけて、見積書と請求書の写しを渡した。スマホが普及し、ドッペル

が流行しようと、金に関する事柄において我が社は未だに紙を使っている。ペーパーレスが騒がれる昨今だが、地域的な普及率は低いし、業者だけではなく個人相手も多いからという事情がある。

「お疲れ様です……今日の昼の分ですか？」

久遠さんは経理の担当で、夕方になると彼女のデスクには多くのドッペルが集まり、隅にあるトレイの中に伝票を入れていく姿をよく見る。電子的なロボットがアナログな書類を扱うというのも妙な話ではある。

「そうそう、この暑い中でハードの部品交換も大変で……って、どうかした？」

ふと久遠さんを見ると、彼女は椅子に座ったまま、上目遣いに私を見ていた。

「夏見さんくらいですよ、わざわざ手渡ししてくれるの。みんな通送役みたいにドッペルを使いますから」

語り口は愚痴るようになっていて、それを悪く思ったのか彼女は視線を落とした。確かにルールがあるわけでもないのに、ほとんどの人はドッペルで伝票を渡している。いくら久遠さんが可愛いだろうと、仕事が忙しければ、わざわざ手渡しする手間もかけられないのだ。

「みんな忙しいから、しょうがないわよ。別に冷たくしているわけじゃないでしょうし」

私が励ますように言うと、久遠さんはイタズラっぽく笑った。

「あれ？　じゃあ夏見さんは暇なんですか？」

「そんなわけないでしょ」

私が微笑んで軽く小突く真似をすると、久遠さんは「きゃーパワハラだ、パワハラ」と笑った。

残業して家に帰ってくると、もう午後九時前だった。手早く夕食を済ませて風呂に入り、髪を乾かすだけで十一時前。あっという間に過ぎてしまう。

息をつく暇もない。若い子や同僚が、昨日は深夜の二時や三時まで趣味をしてた、なんて話をしているのを聞くこともあるが、私には全く縁のない話だった。彼らはどうやって趣味に使う体力を温存しているのだろう。

髪を乾かしながらスマホでニュース記事を見ていると、視界の隅で白いものがちらちらと動き回った。ドッペルが食器を片付けたりしているようだ。もしかしたら私のドッペルの使い方は効率的ではないのかもしれない。家の中では私よりもドッペルの方がせわしなく動き回っている。

家の中で行われる『活動』といえは主に家事だが、それはドッペルに委託している。この家は私の家というより、ドッペルの家なのかもしれない。私がしていることは、食事をしたり風呂に入ったり、ドッペルに世話をかけさせることばかりだ。

ドッペルの関わらないことは何かないかと思っていると、やはり趣味という単語が浮かん

できた。

しかし残念ながら、私には趣味と言われるものが無い。ネイルでハシャぐ年代も過ぎたし、スポーツもしなければ、手先を使う手芸のような趣味も興味はない。映画も見なければ音楽も聴かない。

そんな無趣味でありながら、かといって仕事にも関心は無い。昨日どんな仕事をしてたっけ、と思い出せない日も多くある。それは似たような毎日が忙しく繰り返されるからだ。だが、この前の休日何をしていたかも思い出せない。何かに熱中して取り組んだ記憶も無く、振り返ろうとしても脳がぼうとして浮かんでこない。

我ながら、ひどい人生だと思う。いったい、何のために生きているんだろうか？

いつの間にか真っ暗になった部屋で、私は寝間着姿でベッドの上に寝転がっていた。そういえばさっきまで、歯を磨いて寝る準備をしていたな、と思い出す。自分がいつも通りに動いていることすら自覚が無い。

こんな風に、いつも何かしら動いているから、休みの日まで動こうと思わないのかもしれない。

それはそれでいいのだろう。ただし、それを気にしてしまうのは、そこに疑問を抱いているからだ。私は今の日常の過ごし方に満足していない。かといって、どうにか頑張って休みの日に予定を埋めようとも思えない。

考えるのも嫌になってくる。走馬灯のように、今日一日の出来事が目蓋の裏にフラッシュバックのように浮かんでくる。そのうち映像は今日の事から少し前の事になり、もっと前の事になり、それらが緋い交ぜになった濁流に、私の意識は飲み込まれていった。

いつも通りの事務仕事をこなし、いつも通りの現場作業を行う。

何日か繰り返していくうちに、熊野の方も仕事に慣れてきた。最初の頃からよく動いてくれていたが、慣れてくると動きに無駄が無くなってくる。ノウハウも培われ、そんな姿を見ていると楽しくなってくる。私が努力したわけでもないのに、我が子の成長を見ているような、妙な気分になってしまう。

「仕事の方は慣れてきた？」

現場から帰りの自動車の中で、私はそんなことを訊いてみる。なんてことは無い日常的な会話だ。相手の声が小さかったり、反応が乏しかったりすると話しかけにくくなるが、地声もそこそこ大きい熊野が相手なら、走行中の車内であろうとも気にしないで済む。

「ええ、これだけ現場で作業してれば慣れますよ。正直、こんなに現場に出る仕事だとは思っていませんでした」

「そうね、この頃は現場作業が多い気がするわね。二、三年前は、現場で対応することが無い日も普通にあったんだけど……」

「ドップルの普及率が上がっているからですかね？」

「それもあると思うわ。特に職場でのドップル導入ってパターンが増えてきてる。最初はみんな手を出しにくかったんでしょけど、どんどんドップルを使う企業が増えてるから、乗り遅れる前って導入を始めたんでしょね」

ただ、導入の仕方に失敗すると損害を食う。その損害を回避して、書面に赤い数字を使わなくて済むように私たちが働いている。

「ドップルの実用性が証明されてきたったことですね」

「ええ。どれだけカタログスペックが優秀でも、実際に使えなければガラクタなもの。実際に使われてるってことは、本当に使えるって皆が認め始めたんでしょね」

字面だけの性能ほど、信用性の低い情報は無い。噂や口コミ、そして自身の経験則。提供者側以外、使用者側に近い情報の方が信用に足る。

ドップルは今でこそレンタルやローンなど、様々な契約形態により低コストでの運用が可能になっているが、一般普及が始まった頃は一台三十万近い購入費が前提だった。そんなものは相当な物好きしか買わないだろう。

だが物好きたちが認め始め、値段が落ちて少し金持ちな人たちが買い、そして一般的な価値が認められた。ドップルが認められるまでには五年近い歳月が必要とされた。これが長いのか短いのか、私には分からない。

私が言えることといえば、その五年間で社会が様変わりしてくれたから、私は仕事に就くことができたということだけだ。

様変わりした。その本質は忙しくなった、ということだろう。ドップルの導入によって会社における人手不足がある程度軽減され始めた。多くの会社でドップルが導入され「人員」の底上げに成功し、人海戦術ならぬドップル海戦術による業務の高速化が進んだ。

だが少しずつ問題も見え始めた。新しく人を雇わなくてもドップルさえ導入すればいい、というパターンが増えてきたのだ。つまり高い賃金を払って新入社員を入れ、指導するコストをかけてまで育成する必要も無く、維持費をかけてドップルを運用するだけで済んでしまうのだ。高度なAIなんか用いなくても、日常的、手順的な作業をするだけならばドップルだけでも事足りる。更に人間と違ってドップルは一身上の都合で退職したりしないから、育成費が無駄になることも無い。

人手不足の解消策の一つでもあるドップルが、逆に人を仕事から追いやっていく。なかなか皮肉な話ではある。

だが今更止まることは無いだろう。止まるとしても、また五年、十年という歳月が必要になるはずだ。中小工場然り、放課後児童教室然り、募集をかけても人が来ない不人気の職場では、ドップルの力が必要不可欠になっているのだから。

営業所に帰ってくると、何やら客用入口の方が騒々しかった。窓口は普段なら既に締まっ

ている時間である。実際、窓口は締まっていたが、騒々しさは日中と大差なかった。

「何かあったんですか？」

西谷課長の背中に声をかけると、彼は振り返って、

「ウチで使う新しいドッペルが届いたから、みんなで色々設定してるところだよ」

「ドッペルの社内実務運用の件ですか？」

「そうそう」

新品のドッペルは人型のまま梱包材で巻かれているわけではなく、頭部、胴体、手足などの部位ごとに分解されている。砂糖に群がる蟻のように男性社員たちが段ボールの元に集まってドッペルを組み立てている。

「最初はどんなことさせるんですか？」

「とりあえずは倉庫の部材チェックと、総務や経理あたりの事務作業かなあ……客先に向かわせるようになるのは、ずっと後だろうね」

相手からの相談を受けて独自に判断する客先対応は、ドッペルには高度過ぎて実現できない。この仕事は人間がやるしかないだろう。しかし、部材チェックや定期的な書類作成のような仕事であればドッペルでも可能だ。

今までも我が社では業務でドッペルを運用していた。だが重要度の低い事務仕事を手伝わせたり、自動車の運転をさせたりと、主に雑用が中心だった。

だが今回導入されるのは実務部分のドッペル化だった。いくら堅実な企業で売り上げも悪くないとはいえ、人手が余っているわけではないし、人件費だって減らしたい。そこをサポートするのがドッペルの仕事だが、いよいよ本格的な業務を手伝わせる段になったのだ。

どんな職場でもそうだったが、いきなり全面的にドッペルに委託するわけにはいかない。段階を踏み、簡単なものから少しずつドッペルで仕事を自動化していく。

そして自動化の流れは、とうとうドッペルをサポートする会社にも押し寄せてきたわけだ。ドッペルが「実務」に導入され、人間の仕事を代替わりし始めるようになる。悪意的に言えば、侵食され始めたともいえるだろう。会社における様々な仕事のうち、何割を人間がやり、何割をドッペルがやっているのだろうか？ 今までは人の方が圧倒的に大きかった割合も、これからどうなっていくか分からない。

ふと気付く。これからは仕事をすればするほど、私の仕事は減っていくことになるのだ。同じことの繰り返しは自動化すること。これが現代における仕事の正義であり、ドッペルの存在意義でもある。自動化すれば人件費がかからず、人は別のクリエイティブな仕事に従事できるという理屈だ。

どうやらトレーサを付ける担当になったのは経理のようだ。三人のうちの一人である久遠さんは、男性社員からの説明に聞き入っている。彼女たちの座っている席の隣には、ドッペル用の席が一つ用意されていた。人の傍で立っておく執事やメイドのようなドッペルが、つ

いに人間と同じように椅子に座り出した瞬間だった。

「どう？ 大変そう？」

話が一段落してから、私は久遠さんに訊いてみる。

「しばらくの間、普段の作業内容を見直して、その後トレーサつけて作業することになるそうです。で、ドッペルに実用を任せたら、しばらくは私たちがチェックすることになるみたいで……」

人間の仕事を機械に検査させるのではなく、機械の仕事を人間が検査するとは不思議な話だ。工場であれば不思議でもない光景なのだろうが、オフィスでそれが展開されると、これではどっちが偉いのか分からない。

「最近注文も増えてきてたんだし、ちょうどいいんじゃない？」

久遠さんの立場を考えると複雑な部分もあるだろう。今回の導入には同情を禁じ得ず、つい励ますような口調になってしまう。

「私たち、なんのために働いているんでしょうね、まるで機械のために仕事を作っているみたい」

珍しく彼女が気弱なことを言った。

「ドッペルが仕事をしてくれれば、私たちは別の仕事をするようになるだけよ」

必要な仕事をドッペルにさせて、自分たちは別の仕事を用意してこなす。私は建前で応じたけれど、本心では己の発言を疑問に思っていた。

必要な仕事を機械に任せて、新しい必要性ある仕事を作る。それは本当に仕事というのだろうか？ お金を動かすための口実を作り、価値があるという建前で自分を騙して、実際に数字を動かして結果的に真実を造っているだけの様な気がする。

とんだマッチポンプだ。やらなくてもいいような仕事に価値を与えて、それをこなして給料をもらうなんて。

日常業務はドッペルがこなす。人だらけのオフィスから、人とドッペルが行きかうオフィスになって、更にドッペルだらけのオフィスにシフトする。ドッペルが持ってきた請求書をドッペルが処理する、そんな光景が数年後にこのオフィスで展開されるのだ。

つまり人間の日常生活や仕事は割とパターン的で、いまや人間が過ごしている日常をこなすのは、人間よりドッペルの方が向いているということだ。人間のやることにドッペルが向いているのなら、人間のやることは何処にあるのだろうか？

繰り返しは機械に任そう。表計算ソフトを使うなら、1から10までの数値をタイプ入力なんて馬鹿らしいからオートフィルを使ってドラッグ入力するのが賢い。日常業務は時間短縮とミスの予防のためにマクロを組んで、ボタンを押すだけで仕事が終わるようにしよう。

そうやって繰り返しをオートメーション化して手放せば、二つしかない手を、より有効に使えるようになる。手は偉大だ。これが無ければ創造は出来ない。だから古いものや繰り返

しといった非創造的な活動は、文字通り手放す必要がある。

両手は必要あるものを生み出す。だが作った先から手放していくと、最後にその手に何が残るというのか？ それとも残らない最後を遠ざけるために、遠回りして無意味な必要性をこじつけて、とりあえず何かを作り続けるのか？

人の居場所は、手の中にある。だから人は、何でもいいから手を動かし続けたいのだ。

やることが無いのに席に座っているのは苦痛だ。やることが分からないままパソコンの前に座っていると、画面の端の時計の進み具合に気を揉むだろう。結局のところ人が仕事をする理由は、そんな気疲れする長い時間を過ごしたくないからだ。

だから私も自発的に、そして惰性的に、価値があるか分からない残業をしていた。

他の営業所と、この営業所の顧客対応レポートを比較して読んでいて、気になることがあった。

実は村上家のような出来事は、私にとっては初めての経験ではなく、最近、何度か出くわしている事態だった。私は勝手に『世間離れ』と称している。

子育てだけではない。小出加工とは別の工場の作業員、フリーター、大学生に至るまで、ドッペルはそのままなのに、本人は実生活から極端に離れているというケースが見られる。

世間的にもごく少数だが見られ始めた現象のようだが、この営業所の周りで起きているものに関しては、その乖離が極端だった。フリーターの件に関しては、実に三カ月の間、一度も自分の家に帰っていなかったほどだ。

社会的立場が高ければ、この世間離れの時間は短くなる傾向にある。責任感が最後の戒めとなるのだろう。逆に大学生やフリーターは、元から自由な時間が多いためか、この時間が長くなりがちだ。

最初に予想していたのは、ピーターパン症候群のような現実逃避だった。年齢的にも二十代前半に多かったからだ。しかし対象とされる人物に、村上さんのような主婦も入ってきたことで説は否定的になった。調べによると村上さんは二十九歳で、私とそう変わらなかったが、詳しく調べていくにつれて、四十代の主婦や、リストラに遭い無職になった男性など、四十代以上の世間離れも見られた。

詳しい話を訊かないことには、一連の世間離れの原因は分からない。事件性があるのかすら判然としない。まるで共通項が見つからない。家に帰っていることもあるというのが、ある意味ネックだった。誘拐や監禁の線は薄いから、警察に相談するというのも変な話だ。それがこの問題の一番厄介なところ……問題の重要度が不明ということだった。

やはり本人たちに話を訊くのが手っ取り早い。しかし普段は家にいない以上、接触のしようがない。村上さんの態度からしても、積極的に理由を教えてくれるとは考えにくい。

「お疲れ」

物思いに耽りながら、表計算ソフトの関数とグラフを綴り合せていると、西谷課長が事務所に戻ってきた。

「お疲れ様です」

「まだ残業？ 急ぎの仕事なんてあったっけ？」

「いえ、急ぎの仕事というワケでもないんですが……」

課長が私のパソコンの画面をのぞき込んでくる。

「なにこれ？」

「最近、失踪？ 　　というか、ウチの顧客で家にいないって話が多いんですよ。特にヘビーなドッペルユーザーに多い傾向があって……」

西谷課長は眉根を寄せる。残業してまで、こんな半分趣味みたいなことをしていることを不快に思ったのか、と私は少し心配になった。

「この資料、自分で作ったの？」

「ええ、勝手なことしてすみません……でももしかしたら、何か役に立つかもしれないと思って……」

「うん、そうだね」

端的な肯定は嫌味ではなく、むしろ力強く頷いていた。西谷課長の目には、先ほどと違い真剣さが宿っている。

「明日と明後日……現場に出なかったら、この資料まとめられる？」

私は突然のことに困惑した。

「どういうことですか？」

「会議室で、専務と副社長の前でプレゼンテーションできるくらいに仕上げられる？」

「まあ、二日あればどうにか……」

「頼んでいいかな？」

どうやら深刻な話のようだ。私が「何かあったんですか？」と訊くと、

「実はそのことで、最近何度か、専務と話があってね……こっちも対応する必要があるんじゃないかって話になっていたんだよ」

なるほど、そういうことか。上の人たちも、なんとなく察して懸念していたのだ。そしてそれについて、既に調べている部下が身近にいた。これを利用しない手は無いらろう。

それから二日は事務仕事でしかないけれど、私は久しぶりに気合を入れて仕事に臨んだ。自分でも驚いたことだが、いまだに新しい仕事について私は興味を持てた。普段は仕事も生活もドッペル任せにしているというのに、自分に仕事が回ってきたら元気になるとは、我ながら都合の良い話である。

熊野は西谷課長とともに現場に行った。課長は自分の仕事もあるだろうに「久しぶりの現

場も楽しいものだ」と喜んでいて。この人は厄介事であろうと、イベントが起きると喜ぶのだ。

二日後。

「失礼します」

会議室に入ると、そこには先客が二人いた。専務と副社長。どちらも男性だがタイプは異なる。専務は若々しい外見に細身で長身、二枚目な若旦那といった風貌だ。対して副社長は年を召していて、開襟シャツに黒いジャケット、金色の腕時計やネックレスを着けていてチンピラめいている。

「わざわざ悪いね」

そんな優しい言葉をかけたのはチンピラ風の副社長だった。見た目に反して温厚で朗らかなのが副社長の特徴である。

「いえいえ、私も気にはしていたし……その前から彼女は気にしていたので、調査報告という形で集まって頂きました」

と言って西谷課長が私を紹介する。

「夏見です」

私は会釈して自己紹介する。営業所の一社員でしかない下っ端の下っ端を、副社長が知っているはずもない。

「で、西谷、失踪騒動の話は？」

生真面目な専務が先を促す。だが私は態度よりも言葉に驚いた。失踪騒動なんて表現は、明らかに事件性があると睨んでの表現だ。

「それが、なんとまあ微妙な状況なんですよ」

課長が専務の相手をしている間に、私はプレゼンの準備を整える。といっても、ドッペルに保存しておいたプレゼン資料を、プロジェクター機能で壁に映すだけだ。人型のドッペルはトレースパターンを保存するための記憶装置を内蔵しているが、本質的にはパソコンやスマホと変わらない電子機器だ。普通の電子ファイルも扱える。そして人型というハードの大きさをゆえに持ち運べる情報量が多い。そこに目を付けて最新のオフィスモデルのドッペルには、プロジェクター機能などが付属している機種もある。

私は説明を始めた。我が社でドッペルのサポート対応をした顧客が、仕事に行かなくなったり、自宅に帰らなくなったりしている現象が増加している。年齢は若者に多いが、四、五十代の顧客もいる。共通しているのはドッペルを所有し、生活の多くをドッペルに委託している重度のドッペルユーザーであること。

また、たまに連絡がついたり自宅に帰ったりしていることから、どうやら外圧によるものではなく自らの意志で行っており、帰宅頻度の少なさは、社会的立場の低さと比例してい

る。と付け足す。

私の説明は、ほとんど予想通りだったのだろうが、その対象者が四十人近くになるということに二人は驚いていた。

「本格的に調べた方が良く僕は思います」

専務が堅い口調で言った。専務が生真面目な性格なのは知っていたが、それにしても空気が重い。個人的な感情のせいではなく、何か問題がある様子だった。

「ちなみにこの人たちとは、連絡がつくの？」

という副社長の予想済みの質問に、私は淡々と応じる。

「数日前に対象の一人と連絡は付きました。まったく接触できないわけではありません。ですが、なぜ帰宅しないのか、といった理由に、素直に応じてくれる様子でもないんです」

「どういうこと？」

「こちらと接触する態度が消極的なんです。接触できた人は子持ちの母親でした。二人暮らしの母子家庭で、二ヶ月の間ドッペルで調理している分量が一人分少なかったもので、それとなく尋ねたんですが、誤魔化されました。子供は家で食事をしているとのことだったので、母親は外で食事をしていて、それを隠しています」

「外堀から埋めていくよりも、単刀直入に言ってみたほうがいいんじゃないか？」

「もし当事者たちが組織的に行動している場合、事態が私たちに察知されているとバレてしまいます。そうしたら、今後、当事者たちに接触するのは難しくなるかもしれません」

私が言い終えると、西谷課長が話に入ってきた。

「田崎くんの事を考えると、相手を警戒させないように慎重に行動するべきだと思います。万が一にも田崎くんが強硬になって帰ってこなくなったら、余計に話がこじれますからね」

妙な方向に話が向かっている。私が話を理解できていないのを察してか、副社長が少しだけ声を潜めて説明してくれる。

「例の出勤拒否している田崎くんは、社長の親類になるんだけどね、社長が帰って来いって連絡しても知らんぷりされてるから、それもひっくるめて、どうにかしたいわけよ」

田崎さんが社長の親類なんてことを私は知らなかった。うわさ話も聞かなかったから、本人が話したことは無かったのだろう。あるいは、それがストレスとなって世間離れに至ったのかもしれない。

「もちろん田崎くんの件も心配ですが、四十人もいる当事者たちの親族が警察やマスコミに事件性を訴えたら、ゆくゆくはドッペルが原因であることがバレて、ウチのイメージダウンに繋がりがねません」

専務が割って入る。本人と連絡が全くつかないわけではないのだから、事件にはならないんじゃないか、と思ったが、そうでなくてもマスコミに漏れたら同じことである。大切なのは真実ではなく、このこじれた状況を、どのように処理するかだけだった。

「そこでなんだけど……夏見さんには、この件について調査してほしいと思っている」

ようやく西谷課長が本題に入った。

「私が、ですか？ でもどうやって？」

「方法は任せる。けど、あまり事を荒立てない方向で頼みたいし、何かする前には、逐一僕に報告してほしい」

「こんなことしたことありませんし……第一仕事をこなしながら、こんな調査するなんて、どれだけ時間がかかることか……」

「この件が解決するまでは、通常業務は他の人に分散して任せていいよ」

私の懸念兼控えめな拒絶は、副社長の鶴の一声で流されてしまった。これでは「解決するまで仕事に戻るな」と言っているのと同じである。

「じゃあそういうことで、任せてもいいかな？ 夏見さん。正式には来週にでも課長から指示してもらうから」

専務が有無を言わず私を見据える。蛇に睨まれた蛙とは、まさにこのことだった。

続きは製品版にてご覧になれます。

作者：そせいらんぞー

毎週 LEGO ロボ小説「サロゲート」を dlsite にて販売しています。

毎日 pixiv にて「サロゲート」シリーズの装備の画像を投稿しています。

X(旧 Twitter)

<https://x.com/SoseiRanzo>

Pixiv

<https://www.pixiv.net/users/109117733>

dlsite

https://www.dlsite.com/home/circle/profile/=maker_id/RG01013932.html

サロゲート_ビジュアル・ストーリー

https://www.dlsite.com/home/work/=product_id/RJ01349773.html

reddit

https://www.reddit.com/user/Honest_Olive_8837/submitted/?sort=hot

この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。